

第一部門 〈哲学・思想に関する論文〉 入選論文

宮沢賢治の文学と浄土真宗信仰

―信仰の重層性の基層から―

山根知子

やま ね とも こ
山 根 知 子 さん

[略 歴]

- 年 齢 52歳
住 所 岡山県岡山市
略 歴 岡山県岡山市出身
早稲田大学第一文学部卒業後、日本女子大学大学院文学研究科博士
前期課程・後期課程修了。博士（文学）。専門は日本近代文学・日本
児童文学。現在、ノートルダム清心女子大学教授。
- 著 書 『宮沢賢治 妹トシの拓いた道－「銀河鉄道の夜」へむかって－』
(単著 2003年 朝文社)
『イーハトーヴからのいのちの言葉－宮沢賢治の名言集－』
(共著 1996年 角川書店)
『宮澤賢治の深層－宗教からの照射』 (共著 2012年 法蔵館)
『宮沢賢治の切り拓いた世界は何か』 (共著 2015年 笠間書院)
ほか。

[応募動機及びコメント]

宮沢賢治における信仰は、賢治が「求道すでに道である」「永遠の未完成これ完成である」と述べたように、道を永遠に真摯に追い求め続けるがゆえに重層的に形成され、晩年にはその重層性が賢治の法華経信仰を宇宙意志信仰として普遍性へと導いたのではないかと思われてならない。その層の一層一層を実証的に確認し論じたいという構想の最初の一步が今回の論文になったといえる。本論では、賢治が幼少より盛岡中学校時代まで感化を受けた浄土真宗信仰が、賢治の信仰の基層にいかにか深く刻まれており、その心象がのちの作品においていかにか表現されているかを見出したいと思った。そうした賢治の基層にある浄土真宗信仰には暁鳥敏および暁鳥敏に精神的につながる仏教者たちの影響が大きく、その意味からもこうしたテーマを問う論文に対して、暁鳥敏賞の場にて評価をいただくことができたことは、この研究の方向に後押しをして下さったことと励みに思われ、感謝の至りである。

〔梗概〕

【目的】 宮沢賢治の信仰は生涯にわたって確立され、晩年には世界全体を幸福へと導こうとする「宇宙意志」への信仰に開かれていった。その基層には、十六歳の「歎異鈔の第一頁を以て小生の全信仰と致し候」と述べた時期までに育まれた浄土真宗信仰があり、賢治はそうして心に刻んだ真宗信仰を消失することなく、生涯にわたって信仰の基層に持ちながら重層的に信仰を発展させているといえることを確認することが本論の目的である。

【方法および結論】

主に以下の四点から新たな結論を導いた。

①賢治の人生における真宗信仰について同時代資料から探り、暁鳥敏および島地大等によって導かれた真宗信仰が幅広い仏教思想および西洋の宗教哲学思想との関係で把握されていたことを示した。

②賢治の年譜的事実より、大正三年の法華経との出会いは、真宗系の人脈のなかで真宗信仰の発展として受けとめられていたことを示し、それ以降の生涯でも真宗を離れて法華経を基盤とした日蓮宗に転向したとは言えず、真宗による罪と救いの課題を基層に持ち続けた賢治の信仰姿勢が継続したことを示した。

③賢治の童話創作の契機となった『赤い鳥』創刊号の芥川龍之介「蜘蛛の糸」に対して、処女作「双子の星」と比較しながら考察することで、賢治の創作動機は、当時の真宗信仰に基づく自己の問題意識および信仰内容を表現することであったことを明らかにした。

④「双子の星」から「銀河鉄道の夜」等の作品まで登場する毒をもつ蛇・蝸・竜のイメージと海のイメージが、真宗信仰に裏打ちされて表現されていることについて、『歎異鈔』『教行信証』の記述を符合させることで

確認し、賢治の真宗の宗教性を浮かび上がらせた。

以上の解明によって、賢治が晩年に示した「宇宙意志」への信仰とは「弥陀の本願」への思いが継続し発展したものと捉えることができる。この結論に至った。

はじめに

宮沢賢治は、人生の最初に育んだ浄土真宗信仰の要素を、生涯において保ち続けながら発展させていったのでないかという点について論証することを本論のねらいとする。

一般的には、先行研究でも賢治の法華経信仰については多々考察されるように、賢治が家の宗教である浄土真宗信仰から、十八歳のときに出会った『漢和対照 妙法蓮華経』への感動から法華経信仰へと転向し、生涯を法華経信仰によって貫いたとされることが多い。しかし、賢治が十六歳のとき『歎異鈔』を「小生の全信仰と致し候」と父への書簡にて宣言するほど心に刻んだ浄土真宗信仰は、その後重層的に形成される信仰内容の基層となる要素を持たずにはいないものであると考えられる。

この点についての先行研究は少ないながらも栗原敦『宮沢賢治―透명한軌道の上から』⁽¹⁾が綿密な調査からの事実を押さえ、近年では下西善二郎氏の論文「宮沢賢治と『まこと』の文学」⁽²⁾が暁鳥敏の受容という観点から、また鈴木貞美『宮沢賢治 氾濫する生命』⁽³⁾が賢治の思想形成における同時代の諸要因から丹念に検討を進めている。本稿ではこれらの論を踏まえながらさらに浄土真宗信仰の基層が生涯を貫いていることを確認し、特に賢治の信仰が投映された作品分析を行うことで賢治の具体的な心象に迫り、真宗信仰の要素を見出すことができることを提示したい。

とりわけ作品分析との関係では、最初に童話を書いた時期と信仰との関わりから、賢治が童話を書こうとした動機においても、真宗信仰の問

題意識が浮かび上がってくることから、処女作「双子の星」の創作に至る背景について検討したい。さらにこの処女作「双子の星」の作品論を進めることで、作品分析から真宗信仰に関わる心象スケッチのありかたについて導き出すことができるだろう。そのうえ「双子の星」が集大成とされる童話「銀河鉄道の夜」にもつながる素材やテーマをもつことから、真宗信仰に裏打ちされた要素が晩年まで継続的に流れ至っていることが考察できよう。

賢治は信仰を求めるとき、様々な宗教や科学に関する思想を通して自らが真なるものと信じられる世界を追い求めており、それをありのままの「心象スケッチ」として描いているからこそ、作品にも重層的に信仰の心象が書きとめられているのであるといえよう。その重層性の基層に、真宗信仰の流れが継続してあることを確認し位置づけることができたならば、賢治における新たな宗教性の把握が可能となるのではなからうか。

一、賢治における浄土真宗信仰

最初に、賢治がなぜ処女作「双子の星」を書くに至ったのかという創作とそこに信仰の問題がいかに関わっているかという問題の解明のため、賢治が真宗信仰に心を向けていた宗教的人生について確認したい。というのも、定説では賢治は真宗信仰から青年期になって法華経に出会うと父への反発心とともに法華経信仰へのめり込み、法華文学としての創作を始めたとされているが、真宗信仰について正確に検証し直すことで、真宗信仰に支えられた文学として見えてくる要素があるのではないかと考えるからである。

まず、宮沢家は浄土真宗安浄寺の檀徒であり、父宮沢政次郎は熱心な信仰姿勢を家庭内でも地域においても積極的に示していた。また、政次郎の姉ヤギが「正信念仏偈」や「白骨の御文章」を「子守歌のように聞

かせ賢治もとなえた」（『新校本宮澤賢治全集』年譜）ことから幼少期の信仰的基盤が育まれた。やがて十六歳の賢治が明治四十五年十一月三日付父あて書簡にて「歎異鈔の第一頁を以て小生の全信仰と致し候」と自らの意志として述べるに至るまで、真宗の宗教性が着実に根づいていたことについては疑いを入れない。

また、政次郎は明治三十五年に上京した際、清沢満之を訪問するなど直接の出会いをもったことをはじめ（『新校本宮澤賢治全集』年譜）、雑誌『精神界』を講読しており、随時宗教書を取り寄せることも日常的にしていたことで、清沢満之以下、その私塾「浩浩洞」を中心とする仏教者暁烏敏、佐々木月樵、多田鼎らの執筆した文章が、宮沢家にはいち早く届いていた。そうした関係から、父政次郎は花巻の仏教夏期講習会に講師を招き開催するなど花巻地域における信仰の導き手となる元で、賢治も十歳から講習会に迎えられる講師との触れ合いを通じて信仰の土台を作ったといったという点において大きな学びを得たといえる。

具体的に、政次郎がこの講習会に招き賢治が出会った講師のなかには、明治三十九年、十歳のときの講師暁烏敏にはじまり、多田鼎のほか、明治四十三年、十四歳のときの祥雲雄悟らがいる。明治四十四年、十五歳のときには、講師は島地大等であり、賢治はその後、盛岡願教寺での仏教夏期講習会にも島地大等の「大乘起信論」の講話を聞くため参加している。

そうしたなか、明治四十五年の賢治は、『歎異鈔』の第一節と判断される「歎異鈔の第一頁」を挙げて、「小生の全信仰と致し候」という言葉を述べているが、ここにはどのような思いが込められているのだろうか。

そこで、この前年明治四十四年に暁烏敏が『歎異鈔講話』（無我山房雑誌『精神界』において明治三十六年から八年にわたる連載『歎異鈔』を読む）をまとめたものを出版しており、賢治は暁烏敏の『歎異鈔』解釈について、講話内容とともに吸収していたと考えられる。

まずは、『歎異鈔』第一節の冒頭文「弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まをさんとおもひたつ心の発るとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり」という箇所に対して、暁烏敏が『歎異鈔講話』で言及する注目すべき内容は「宗教の尤も肝要なところは、この信ずると云ふところにあるのである」と語ったあと、トルストイの言葉を引いて次のように述べていることである。

トルストイが指した彼は愛の神であるが、私が信ずるのは御慈悲の如来であるから、細かな点に至つては異なつてをることは勿論であるが、その意味は殆ど同じいのである。(中略)私共が日常煩悶苦痛に陥るのは宇宙に満ちてゐる慈悲の如来の御心に順はぬからである。されば私共は如来に助けられぬのではない、如来の御助けを信じないで苦しんでをるのである。(傍線引用者 以下同)

ここで、暁烏敏が、トルストイの神観と比較し同質性を認めながら信仰の対象について「御慈悲の如来」という人格的絶対者について語っていることは注目すべきであろう。その人格的絶対者が抱いている心は、「宇宙に満ちてゐる慈悲の如来の御心」であるという。これは、この引用に続く箇所に「私共は仏の御名を称へて宇宙の大霊の弥陀如来に呼びおこされ、茲に念々の安心を得て刻々の力を得来たるのである」とも言い換えられている。ここに、「宇宙の大霊」という言葉が使用され「弥陀如来」を把握した概念になつていゝことに、エマーソンの思想からくる影響が考えられる。暁烏敏自身が意識的にエマーソンの言葉を使用していることは、ちょうどその直後の文中にエマーソンに触れており、「吾人は吾人をしてその真理の受用者たらしめ」「この大智慧の光明の通路となるのみ也」という言葉を引用し、その言葉から「仏力他力の撰取の妙趣を味はふのであります」と述べていることからわかる。

ここから、賢治の信仰における二つの重要な点について指摘すること

ができる。賢治自身がエマーソンの本を読んでいたと証言されているのが、明治四十四年の二学期であるから、明治四十四年の発行である暁烏敏著『歎異鈔講話』の時期と近いことがわかる。このことから、暁烏敏のエマーソンへの言及が、賢治の真宗信仰のなかで「慈悲の如来」に対して、エマーソンの「宇宙の大霊」としての把握をもたらす貴重な契機となつたことが推測されるのである。さらに、それは晩年の「宇宙意志」信仰にもつながつてこよう。

なお、賢治の初期の初期断章「旅人のはなし」から(大正六年七月「アザリア」第一号)にはトルストイの「戦争と平和」が登場し、次の短編にもトルストイの『復活』に因んだと思われる初期断章「復活の前」という題の作品を書いており(大正七年二月「アザリア」第五号)、この作品には次のように暁烏敏の名が登場する。

暁烏さんが云ひました「この人たちは自分の悪いことはそのけで人の悪いのをさがし責める、そのばちがあたつてこの人たちは悲憤こう慨するのです」

この箇所は、アフォリズムの形をなす作品の一部であり、この直前にはまた別の体験的内容が次のように綴られている。

黒いものが私のうしろにいつと立ったり又すうと行ったりします、頭や腹がネグネグとふくれてあるく青い蛇がゐます、蛇には黒い足ができました、黒い足は夢のやうにうごきます、これは竜です、ととう飛びました、私の額はかぢられたやうです

ここには、賢治が翌大正八年に執筆したと推定されている「手紙一」に「はげしい毒」をもつた竜が蛇の形になつていた状況で罪の問題に直面している描写もあわせて、先の暁烏敏の言葉と関連して示唆深い。

さて、先の明治四十四年において、暁烏敏が『歎異鈔講話』の中で述べた「この大智慧の光明の通路となるのみ也」という言葉を賢治は自らが通路となるために、この後さまざまな大乘仏教の修行で試みたことは、

賢治がその後も花巻夏期仏教講習会に招かれた仏教者に幅広い導きを求めた姿からわかる。

大正二年から三年にかけては、報恩寺の尾崎文英について参禅し、また尾崎文英が講師を務めた夏期講習会に参加したと推定されるように、禅宗に関する学びと宗教的体験をも深めたといえる。

なお、この時期には仏教をも超えて、キリスト教（カトリック、プロテスタント、ロシア正教）への接触もなされていることは、暁烏敏、島地大等らが他の仏教思想や西洋の宗教などから真実の真宗思想を見極めようとする姿勢に学んだものと考えられる。

そうした開かれた仏教者からの信仰的学びの広がりの中で、この数ヶ月後の九月には島地大等が導く形で、島地大等編による『漢和対照妙法蓮華経』に出会ったのである。

二、弥陀の誓願から宇宙意志へ

―法華経との出会いについての検証―

大正三年九月に、島地大等編著『漢和対照 妙法蓮華経』が、父政次郎の法友高橋勘太郎から贈られたことで、賢治は法華経を読んで「異常な感動」をしたという。ここから、賢治は真宗信仰を離れ、法華経信仰へと移行したと受け取られがちである。しかし、実は賢治が真宗信仰の視点から法華経等の仏典を読むことで、まずはその信仰の発展として自分の課題の解決を模索していたのではないかという点について論じてみたい。

最初に、法華経を含む幅広い仏教認識およびキリスト教や哲学思想との出会いが、真宗の基盤のもとで導かれた事実留意したい。特に、法華経に出会った大正三年から、日蓮宗在家仏教団体の国柱会に入会する大正九年以前において、賢治は法華経と真宗信仰とに対してどのような

認識をもっていただろうか。後述するように、この期間のなかの大正七年に処女作がどのような信仰の背景から生まれたのか、その精神的基盤について明らかにしておくことは重要であろう。

まず、『漢和対照 妙法蓮華経』を贈った高橋勘太郎は、暁烏敏も多田鼎も一目をおく人物であり、「真宗の宗義につき、全仏教の教理に涉り、転じて一般の哲学や文芸にも及び、カント、ヘーゲル、スペンサー、エマースンの名をさへ、度々氏の口から聴いた」（『新校本宮澤賢治全集』年譜）と言われる真宗信者であることと、贈られた法華経の見返しには墨書きで法友政次郎にあてての書き込みがあったことから、賢治はこの二人の信仰に通底する姿勢、すなわち真宗信仰を幅広い学びから深めようとする姿勢を感得する思いのうえで法華経への感動をしたにちがいないと思われる。

また、その法華経の冒頭には「賛序」が置かれ、聖徳太子、伝教大師、弘法大師、法然聖人、道元禅師、日蓮聖人、存覚上人、白隠禅師と、八名の法華経に対する賛辞が掲載されていることも、賢治にとって法華経が念仏宗の法然聖人を含め広く高僧たちが讃える重要な経典として捉えられ、心を打たずにはいられなかったのではないだろうか。

さらに、この法華経を編纂したのは、真宗の僧侶であり学問的に広く仏教経典への見識の深い島地大等であったことから、賢治にとって法華経は、その当初においては、それまでの浄土信仰をより発展させるものと捉えたのではないかと考えられる。

特に賢治の島地大等への思いに注目していくと、賢治は前述したように明治四十四年に、花巻の仏教講習会で島地大等の講話を聴いた後、盛岡北山の願教寺でも島地大等の講話を聴いている。この講話は大乗起信論についてであった。島地大等は、大乗起信論の思想について「予常に謂く、大乗起信論は是大乗仏教概説なり」と述べ、また「日本叡山の教学に起信論教義の交渉深きは勿論」（いずれも「大乗起信論開題」『国

訳大蔵經 論部 第五卷』大正十年五月 国民文庫刊行会)と捉えているように、各仏典の深みに相通じる思想であると考え、のちに『漢和対照 妙法蓮華經』を出版するという段取りとしても必然的な進行を感じていたと思われる。

賢治においても、この島地大等の導きに応じて、その大乘起信論の思想が見出せる法華經の内容としてとりわけ「如来寿命品」第十六への感動につながったのだと思われる(拙論「宮沢賢治と大乘起信論―「心象スケッチ」の基層にある仏教的深層心理の認識―」『論攷宮沢賢治』平成二十五年一月)。

さらに、この時期において賢治が『漢和対照 妙法蓮華經』に感動したことが、真宗の信仰を離れたのではないことは、この後の歩みが物語っている。賢治は、盛岡高等農林に入学した翌大正四年四月には願教寺に島地大等を訪い、同年八月には、願教寺で開かれた夏期仏教講習会にて、島地大等の「歎異鈔法話」を一週間にあたり聴いているのである。その時賢治は短歌を詠み、「本堂の／高座に説ける大等が／ひとみに映る／黄なる薄明」(「大正四年四月」という島地大等の法話中のまなざしに触れている。賢治はこの『歎異鈔』の学びから、島地大等が『大乘起信論』から『漢和対照 妙法蓮華經』へとつながる仏教思想の裏づけをもって『歎異鈔』から汲み出すさらに広く深い信仰を自分のものとしようとして見受けられる^五)。

引き続き、賢治の島地大等への思いは、翌大正五年四月四日付高橋秀松書簡では「聖道門の修業者には私は余り弱いのです」という暗に浄土門への思いを述べた文脈で、偶然島地大等に会った過去の出来事を述べ、さらに前日にも島地を訪れたことについて触れていることから、真宗信仰を基盤に仏教信仰を深める島地大等への思いが法華經と出会ったのちも継続していることが窺えよう。こうして、同年大正五年に島地大等が刊行した『歎異鈔講本光融館』(光融館)を、賢治も自らが直に聞いた

島地の法話として手に取った可能性は高いと思われる。

このように『漢和対照妙法蓮華經』と出会った大正三年を経たあとも、賢治は『歎異鈔』の学びを継続しているように、真宗を信仰の基盤とする姿勢が続いているということは、あまり注目されていないが、大変重要な意味をもとう。しかも、これ以降の生涯についても、賢治は晩年の「文語詩篇ノート」に島地大等の名を記すなど、暁鳥敏や島地大等らから得た、真宗信仰を幅広く捉えた思想に思いを寄せながら、罪深い衆生を救おうとする「弥陀の誓願」への信仰を、後述する「あらゆる生物をほんたうの幸福に齎したいと考へてゐる」「宇宙意志」信仰へと広げ深化させていったのではないだろうか。その観点から作品を読み直すことで、信仰と関わる新たな発見を提示する必要がある。

三、処女作「双子の星」の創作動機について

―「蜘蛛の糸」による罪の問題から―

次に大正七年夏に処女作として書かれた童話「双子の星」がどのような宗教的動機によって書かれたかについて考察を及ぼしたい。賢治の創作について従来の見解では、大正十年に出会った国柱会の高知尾智耀にかけられた言葉から晩年の「雨ニモマケズ手帳」に「高知尾師ノ獎メニヨリ／法華文学ノ創作」と記されていることを根拠として、「法華文学」の創作という目的が通説となっている。しかし、それ以前の大正七年における処女作の創作動機については、先の年譜的確認からも真宗信仰の土壌からの動機が考えられよう。

そこで、まずは処女作の童話が書かれる大正七年夏頃から法華經信仰が日蓮宗在家仏教団体国柱会に入会して日蓮への信仰が強く意識される大正九年から十年頃までにおいては、書簡等には題目や日蓮の名が登場するが、作品の描写には浄土真宗の心象が登場しているとみることがで

きる。このことを、大正七年夏に生まれた童話「双子の星」を中心に分析を及ぼしてみたい。

賢治が大正七年に「双子の星」をはじめとする処女作を書いたことについては、多くの研究者が指摘するように、鈴木三重吉主宰の児童雑誌『赤い鳥』の創刊号を読んだことが契機になったと考えられるが、『赤い鳥』との関係における信仰上の具体的な問題はどのように見出せるかについては論じられていないといえるため、ここで論じたい。

まず、『赤い鳥』創刊号には芥川龍之介の「蜘蛛の糸」が掲載され、お釈迦様と罪人犍陀多との関係が描かれていることが、賢治の目をひいたと考えられる。ちなみに同号には他にも鈴木三重吉の（民話）が掲載され、「大いたち」の民話のなかに描かれる罪の問題からも「双子の星」はこの二作からの刺激を受けていると考えられる。賢治の処女作としては童話「蜘蛛となめくじと狸」も同時期に書かれたとされ、生きるために他者をだましてその命を奪う罪の問題としてのテーマや表現方法の類似からも、「大いたち」との関連が深いといえる。同号には他にも山崎寛作「おせつかい」（推奨童話）など他の命を食べる問題が描かれており、賢治は「私は春から生物のからだを食ふのをやめました」（大正七年五月十九日付保阪嘉内あて書簡）と述べたばかりの心境から、他の命を奪って生きる罪意識の問題には敏感だったと思われる。

そうした『赤い鳥』の影響関係のなかでも、ここでは「双子の星」の創作動機を「蜘蛛の糸」に探る視点に絞って考察する。

まず賢治が「蜘蛛の糸」を読むことで、自分なりの宗教的テーマを童話の形で表現できるということに気づいたと考えられることを提示したい。

次に、「蜘蛛の糸」の作品構造では、極楽と地獄が、空間的に蓮池の上とその底の血の池という上下関係にある。その極楽のお釈迦様が、罪人の犍陀多の心にかつて蜘蛛を助けたという善の心を見出しながらも、地

獄から自分だけが蜘蛛の糸によじ登って助かるうとした心について「犍陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相当な罰をうけ」たために、蜘蛛の糸が切れて犍陀多が地獄に再び落ちていったのだと認識したことについて、賢治がどのように考えたかが問題となる。

そのために「双子の星」について「蜘蛛の糸」と比較すると、同様の上下の空間構造と、罪と救いについてのテーマにおいて共通性を有しながらも、賢治は「双子の星」に自己の罪と救いについての信仰をイメージに託して描いているといえる。具体的には、空間を上下する双子の設定は、犍陀多が罪人であるのとは異なって、天上の属性をもつ存在である。

さらに「蜘蛛の糸」では、主人公が救われるためならば他のいのちを蹴落とすという自己中心的人間が罰せられ救われない話であるのに対して、「双子の星」では、まず第一話の双子が毒をもつ蠍や毒を受けた大鳥すなわち悪を負う存在に徹底的に寄り添う生き方をしている点が注目される。第二話では、天上の双子が騙されて海の底に落とされ、罪を負う海底の存在に出会い、その後天上に戻ることができ自分が救われても、騙した者にも罪を負う者にも救いを願う菩薩の精神が描かれる。

そのうえ、両作品における絶対的存在に目を向けると、「蜘蛛の糸」のお釈迦様は、「無慈悲な心」における罰は相応だと判断するが、「双子の星」の空の王様は、双子が罪を負う存在の許しを願うのに対して、明確な結末は描かれていないながらも、双子によって許しを与えるはずの存在として信じられているという点には、賢治の真宗信仰の絶対者への心が映じていよう。

このように、賢治が『赤い鳥』創刊号から刺激を得て気づきを得た一点目は、童話というジャンルが宗教的問題を問うことができる文学であるということであり、二点目は自分なりの罪と救いの問題意識と真宗的信仰を投映させた宗教文学を書きたいという思いが生まれたと考えられ

る点である。

四、賢治文学を貫く浄土真宗信仰

こうして誕生した「双子の星」について、賢治がそれまで心に蓄えた真宗信仰の要素や心象風景がどのように含まれているか、なかでも賢治の信仰と関わる生涯を貫いた要素はどのようなものであったかについて確認しようとする際、晩年の集大成である童話「銀河鉄道の夜」にも描かれる着目すべき二つの重要なテーマが浮かび上がる。その一つは毒をもつ蝮（蛇・竜）のテーマであり、もう一つは海（水）のテーマである。それは親鸞が使用した教えの核心と関わる象徴表現であることから、これらのテーマに着眼することで真宗信仰との関係を読み解くことをねらいとしたい。

毒をもつ蛇・蝮・竜のテーマ

まず、「双子の星」の詳細な分析に入る前に、賢治作品を俯瞰的に見ておくと、蛇と蝮と竜が登場する作品が、各時代に執筆されていることは注目に値する。そうした作品のなかで、これらの生き物は毒をもっているという共通の問題を背負っていることも意味深いといえる。

年代順に挙げると、そもそも賢治は短歌において「大正三年四月」と整理された歌稿のなかで、「南天の／蝮よもしなれ魔ものならば／のちに血はとれまづ力欲し」と詠んでいることから、法華経との出会い前に蝮のモチーフを真宗の土壌から得ていることが指摘できる。童話においては、最も早い処女作「双子の星」において最も早く蛇・蝮が天の蠍座と海蛇として登場し、蝮は、その後、晩年の集大成「銀河鉄道の夜」に再登場している。

また竜と蛇については、「手紙一」（大正八年下旬執筆推定）に「げしい毒」をもった竜が、蛇の形になっているとき、人間に見つかり皮をはがされることに対して、「もうわるいことをしないと誓つたしこの獵師をころしたところで本当にかあいさうだ。もはやこのからだはなげすめて、こらへてこらへてやらう」と考え、「すつかり覚悟がきまりましたので目をつぶつて痛いのをじつとこらへ、またその人を毒にあてないやうにいきをこらして一心に皮をはがれながらくやしいといふころさへ起しませんでした」という結末が描かれる。

さらに竜については、「竜と詩人」（大正十年八月二十日執筆推定）に老いた竜チャーナタが「わたしは千年の昔はじめて風と雲とを得たとき己の力を試みるために人々の不幸を来したために竜王の「数文字空白」から十万年この窟に封ぜられて陸と水との境を見張らせられたのだ」「わたしは日々ここに居て罪を悔い王に謝する」というように、罪を背負った存在として水に沈んだ存在として描かれている。作品の結末でも「竜のチャーナタは洞の奥の深い水にからだを潜めてしづかに懺悔の偈をとへはじめた」とされる。

このような作品から、賢治の信仰の問題について考えると、罪や負い目を背負う存在の回心と救いの問題が賢治の大きな課題であったといえよう。そこに蛇・蝮・竜のイメージが浮上し使われるのは、賢治が親しんだ親鸞の教えからくる象徴表現として、例えば親鸞の『教行信証』「信巻」における次のような記述を意識していたからだと考えられる。

貪瞋邪偽奸詐百端にして悪性侵め難し、事、蛇蝮に同じ。三業を起すといへども、名づけて雑毒の善とす。

また、「正像末法和讃」でも蛇蝮竜は次のように登場している。

劫濁ノトキウツルニハ

有情ヤウヤク身小ナリ

五濁悪邪マサルユヘ

悪竜毒蛇ノゴトクナリ
悪性サラニヤメガタシ

コ、ロハ蛇蝎ノゴトクナリ

修善モ雑毒ナルユヘニ

虚仮ノ行トナツケタル

蛇蝎奸詐ノコ、ロニテ

自力ノ修善ハカナフマジ

如来ノ廻向ヲタノマデハ

死慚死愧ニテハテゼム⁽⁷⁾

これらには、いずれも蛇・蝎・竜に悪性としての毒すなわち罪をほらむ存在という象徴がなされている。このような蛇・蝎・竜とその毒にたとえられたイメージをもちながら、賢治は自らの問題として、罪を背負う存在にとつて救いはいかにあるかという真宗の問題に向きあっていたのではないかと推察される。

海（水）のテーマ

一方、海（水）のテーマにおいても、賢治作品には水中に墮ちることに関する描写が、処女作「双子の星」から集大成の童話「銀河鉄道の夜」に至るまで、継続的に見られる。しかも、水中に墮ちる主体については、先の毒をもつという設定がなされた生き物および何らかの罪や悩みを負う者であるということは、蛇・蝎・竜のテーマと海のテーマが深く関連することを示しており、信仰的な意味が見出せるものである。

ここで、賢治は真宗信仰のなかでどのように海（水）のテーマを心に映し出していたかという点について、まずは親鸞の『教行信証』『総序』における冒頭の次のような表現から、闇と光のイメージとともに、海を通して救いの光明について考えていたと考えられる。

まず、『教行信証』の「総序」において次の表現がなされる。

竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は闇を破する恵日なり。

この冒頭箇所が続くように、『教行信証』には、海が様々に表現される。その表現は、悟りと迷いの二義の双方に見られ、阿弥陀仏の世界としての「大信海」「大宝海」「本願海」「大智海」等の表現と、衆生の煩惱世界としての「難度海」「生死大海」「群生海」「苦海」等の表現がある。

さらに、後者の迷いの海を渡らせる船のイメージについては、例えば「正像末法和讃」と「浄土高僧和讃」からそれぞれ用例を引くと、次のように表現される。

小慈小悲モナキミニテ

有情利益ハオモフベキ

如来ノ願船イマサズハ

苦海ヲイカデカワタルベキ⁽⁸⁾

生死ノ苦海ホトリナシ

ヒサシクシヅメルワレラヲバ

弥陀弘誓ノフネノミヅ

ノセテカナラズワタシケル⁽⁹⁾

これらに加えて、「正像末法和讃」の「生死大海ノ船筏ナリ」という言葉もあり、ここには「ミダノグワン⁽¹⁰⁾（願）ヲフネ・イカダニタトヘタルナリ」という注記が施されるように、船・筏には衆生が苦海をわたることを望む「弥陀」の「誓願」としての意味が込められていることも理解される。このような親鸞の表現から、賢治は海と船のイメージを通して、海に沈む者を弥陀の誓願としての船という乗り物が必ず乗せて渡らせてくれるものであるという信仰を育んでいただろう。

五、「双子の星」―弥陀の誓願と罪の問題から

では、「双子の星」は、このような信仰にどう関わって物語化されているだろうか。

まず、「双子の星」として示された星そのものに目を向けたい。双子の星とは、早くから草下英明氏も指摘しているように、季節の問題としても「恐らく双子座のことではなく、蝸座の毒針にあたるえとりの二星からの思いつきである。二つとも緑色の星で、古来、兄弟の星と見られている。日本でも「兄弟星」の和名があり、兄弟が鬼婆に追われて天の網（蝸座）にすがって天に昇ったという伝説がある」と述べたことが定説(1)になっている。ここから賢治は、ギリシヤ神話のさそり座の形を知った上で、和名「兄弟星」がその尾にある毒針の先の二重星であることを認識して、双子の兄弟をさそり座とは別の存在としたと考えられよう。では、その双子の信仰的位置づけを考えると、空の王様のもとで、星の運行の一役を担っている天とつながった存在であり、しかも双子はその位置から蠍の毒の要素と大変近い関係にあるといえることから罪の問題はどのように描かれているだろうか。

まず第一話で、蠍（さそり座）と大鳥（からす座）が登場して両者が喧嘩をするのを、双子が危険を承知で懸命に仲裁し何とか無事に役目に戻るといふ物語では、蠍の毒に罪の問題が見出せるのではないかと思われる。

この蠍は、「みなみのそらの、赤眼のさそり／毒ある鉤と大きなはさみを／知らない者は阿呆鳥」と大鳥の悪口を言って怒らせ、「一つ鉤をお見舞しますかな」と「尾の鉤」を突き上げる。「大鳥は胸を毒の鉤でさゝれて」、「チュンセ童子が大鳥の胸の傷口に口をあて」、「毒のある血を吸ってはき出し」てやる。こうして助かった大鳥も、蠍が傷を受けて気を失っているのを見て、「畜生。空の毒虫め。空で死んだのを有り難いと思へ」

と言う。さらに、目を開いた蠍は、双子に家まで送ってほしいと頼み、二人は次の星めぐりをする時間に間に合わない可能性がありながら危険をおかして送り届けたのである。

この作品では、双子の視点から毒に注目して読むと、双子は毒をもつ蠍に対しても喧嘩の相手である大鳥に対しても、罪ある者に寄り添う姿勢をもって、大鳥の体に入った毒を吸い取るまでに関わっていく。

次に第二話は、空の鯨というあだ名の彗星が登場し、双子は彗星に騙されて海に落ち、海蛇の王のおかげで空に戻るといふ話である。彗星は、王様からの許しがあつたと騙して旅に誘い、途中で天から海の底へと二人を落としてしまう。

この物語では、海の底に落ちるといふことが「悪いことを天上でして来たやつ」の「天からの追放」であると設定されており、星は「ひとで」となり、彗星は「海の彗星」というあだ名の「くじら」や「なまこ」となるように、天上と海底は対比的関係にある。また、空の王様に対しては、海蛇の王様が存在するが、空の王様は海蛇の王様にとっての「唯一人の王」で「先生」であるという。

このようななかで双子は、真実を知った海蛇の王様によって海から竜巻で空に帰されたとき、空の王様に、「海の底のひとでがお慈悲をねが」っていることを伝えて許しを請い、さらに「なまこもしできますならお許しを願ひたう存じます」と述べている。ここで、どんな罪ある存在でも双子が罪ある者に寄り添っていることは見逃せない。それは『歎異鈔』第一節にある「老少善悪のひとをえらばれず」「罪悪深重煩惱熾盛の衆生を助けんがための願」であるといふ誓願を自らの願いとす姿として、菩薩行の投射であるといえよう。従来、賢治における菩薩においては法華経の常不軽菩薩の指摘がほとんどであるが、『歎異鈔』の「弥陀の誓願」すなわち「本願」は「もし衆生がたすかならければ、自分も仏にならない」といふ誓いであるから、前述した暁鳥敏の述べる「大智慧

の光明の通路」となる菩薩行を望む考えについて、すでに賢治は『歎異鈔』の第一節をもってこの本願を自らの願いとした信仰の礎に据えており、この双子の姿を書いたといつてよからう。

六、「ひかりの素足」―罪と慈悲の大きさから

次に、「銀河鉄道の夜」とのつながりについて考える前に、法華経に出会ったあとの大正十年頃の可能性が高いとされる「ひかりの素足」の問題に言及しておきたい。これは、弟檜夫に伴って、兄一郎が雪と風のなかで臨死体験をする物語であり、その最初の感覚は「いきが苦しくてまるでえらえらする毒をのんであるやうでした」と描かれる。そこに登場した鬼は「罪はこんどばかりではないぞ。歩け」と鞭を振るう。

そこで、法華経の「によらいじゅりやうぼん第十六」という声が聞こえてきて真っ白なすあしの人が登場し、二人の罪について「おまへたちの罪はこの世界を包む大きな徳の力にくらべれば太陽の光とあざみの棘のさきの小さな露のやうなもんだ。なんにもこはいことはない」と諭すのである。

ここですあしの人は、二人の罪の存在について、罪が無いとは言わず、大きな徳の力に比べて罪の存在は極小であると伝えている。

この点について、島地大等は、『歎異鈔』第一節の本願についての講話「歎異鈔講讀」^(註)で次のように述べている。

譬へば氷の一塊が融けるとその氷全体が水となる、煩惱の氷全体がお慈悲の太陽の熱で水となる。或は渋柿の渋が日に照らされて甘くなる、渋があるから甘味が出る、渋がなければ甘くならない。罪障があるからお慈悲が徹底する、真実の親心がいたゞける。罪悪は氷や渋のやうなもので、いくら大きくたくさんあつても、お慈悲の力で皆菩提の水・さとの甘味に転ぜしめられる。お慈悲の力が絶

大だから如何なる悪も恐れられないのである。

この譬えは、先の「おまへたちの罪はこの世界を包む大きな徳の力にくらべれば太陽の光とあざみの棘のさきの小さな露のやうなもんだ」という表現と同じ主旨を有しているといえよう。

このように、法華経に出会ってからの作品「ひかりの素足」は、まさに法華経自体が登場する作品であるが、すあしの人という人格的存在が慈悲という心を注ぎ、罪と慈悲の大きさから救いについて説いていることから、基層には真宗的要素が認められる。

さらに言えば、「ひかりの素足」の地獄の世界における賢治の鬼や化物の描写の仕方については、親鸞が『教行信証』「化身土巻」に前述した『大乘起信論』を取りあげていることから、そこで魔や鬼神等に惑わされることについて「唯心の境界」つまり「ただ三界は心が作りだす境界^(四)だ」と述べていることを賢治が念頭に置いての描写であると考えられる。そうであれば、「ひかりの素足」には賢治のなかで真宗信仰や『大乘起信論』を基層にして法華経世界が捉えられた信仰の重層性が作品中で醸し出されているといえるのである。

七、「銀河鉄道の夜」―蝸と海のイメージから

続いて、大正十三年頃から昭和六年頃まで推敲を重ねた「銀河鉄道の夜」において、蝸と海のイメージを通して描かれた罪の問題について考え進めたい。作中では、銀河鉄道の車窓から男の子が「二つのお宮」を見つけて叫んだ「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ」という言葉から、「双子の星」の話が、「からすと喧嘩」したという第一話と「彗星がギーギーギーギー云って来た」という第二話が想起されている。ここから、「銀河鉄道の夜」に登場する蝸の話は、かつての「双子の星」の蝸の罪からの連続性を基に解することができるよう導かれてい

よう。

そこで姉は「双子の星」という話について、「あたし前になんべんもお母さんから聴いたわ」「天の川の岸にね、おっかさんお話なすったわ」と母から聴いた話であることを繰り返している。そのあと、父から聴いた話として蝸の話について語るのであるが、その間に次のような蝸の火の描写があることに注目したい。

川に向ふ岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまっ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のやうに赤く光りました。まったく向ふ岸の野原に大きなまっ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたさうな天をも焦がしさうでした。ルビーよりも赤くすきとほりリチウムよりもうつくしく酔ったやうになってその火は燃えてゐるのです。『あれは何の火だらう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう。』ジョバンニが云ひました。「蝸の火だな。」カムパネルラが又地図と首っ引きして答へました。

ここで描写された火と煙については、これまで仏教方面からの指摘はないが、さらに暁鳥敏の『歎異抄』第一節についての講話で次のように述べている点には、真宗の土壌での賢治の心象が投射されているよう。

修行は内にあるものが外に表はれてゆくのです。だから信心を火にたとへ、修行を煙にたとへて、聖人が、「信火内にあれば行煙外に現はる」とおっしゃった。^(二五)

このたとえをもって考えるなら、賢治は「銀河鉄道の夜」で、かつての「双子の星」を登場させることで、毒をもっていることに対して罪も意識しないために回心もしなかった蠍の話から、罪を自覚する体験を経て信心をもって回心し神を求める思いになった蝸の話について新たに父から聴いた話として展開したのではないだろうか。

さらに蝸の火については、前述した箇所ではジョバンニが「何を燃や

せばできるんだらう」と述べ、またかほるがジョバンニたちに、次のように伝えている。

「蝸がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聴いたわ。」

このように、蝸の火は「燃やす」「やける」という表現から、煙を出すまでに燃える対象である内面の要素があり、それは蝸の信心が開花していく心象であるのだろう。

そのうえ、蝸の毒についてのかほるの表現も重要であり、かほるが父から聞いた話をする際に、毒を持っている虫であることを「そうよ」と否定せず認めたくえで、「だけどいゝ虫だわ」と述べていることに、罪をもつこと自体についての判断以上に、その罪に気づいてその心を神に向け祈ることのできる信心を実行していることへの評価を示していることが見出せる。

つまり、それは「むかしのバルドラの野原に一ぴきの蝸がゐて小さな虫やなんか殺してたべて生きてゐた」という段階では、自らを振り返っていないと思われるが、「ある日いたちに見附かつて食べられさうになった」ときに、さきりは逃げて井戸の中に落ちて溺れはじめ、次のように祈ったことが語られる。

あゝ、わたしはいままでいくつのものを命をとったかわからない、そしてその私がかんどのいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもたうとうこんなになつてしまつた。あゝなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちにならなかつたらう。もしたらいたちも一日生きのびたらうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。って云つたといふの。もしたらいつか蝸はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になつて燃えてよる

のやみを照らしてゐるのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さん仰ったわ。ほんたうにあの火それだわ。

このような蝸の祈りについて語った姉が、タイタニック号沈没事件をモデルとする船で海に沈んだあと銀河鉄道に乗っている存在として設定されていることには、青年家庭教師が船の沈む過程で自己の命と他者の命のどちらを優先するかを選択に煩悶した結果、他者を押しつけなかつたゆえに、彼らの救いにも蝸につながる宗教的な意味が託されている。

賢治は、海（水）のイメージと船をはじめとする乗り物のイメージとしては、カムパネルラがザネリを助けようとして飛び込み溺れる川と、かほる達が他のいのちを優先した結果沈んで溺れた海から、両者が船から天上へ向かう銀河鉄道に乗り換える設定において、救いへ近づくという真宗の意味を託したのだと言えまいか。その銀河鉄道のなかで、さそりの話から、溺れたさそりが「如来の誓願」に類似した祈りをし、闇を照らす人となって燃えて煙をあげている存在となるということ、まさに落ちること、すなわち他者の救いのために己を無にすることで、如来の誓願を強く自分のものとする者となるのだといえよう。

この海（水）のテーマをめぐる誓願という観点については、「双子の星」から「銀河鉄道の夜」までの経過を辿っていくと、その間に大正十一年五月二十一日の日付が書き込まれた詩「堅い瓔珞はまっすぐに下に垂れます」で、天人が湖に落ちるときの願いに対して次のように表現していることから、賢治の思いが窺えよう。

こんなことを今あなたに云つたのは
あなたが落ちないためにでなく

落ちるために又泳ぎ切るためにです。

誰でもみんな見るのですしまた

いちばん強い人たちは願ひによって落ち

次いで人人と一緒に飛騰しますから。

ここに、一番強い人としての願いは菩薩行といえよう。この菩薩のイメージも水に落ちてそこを渡り飛翔するというイメージによっている。つまり、還相したあと人々とともに往相しようとする菩薩心が、水のなかに落ちてその水を渡り、飛翔するイメージとして、賢治のなかに真宗信仰の当初から引き続き形成されていたといえる。この思いは、前述した「蜘蛛の糸」との比較において「双子の星」の双子が見せた菩薩的姿勢と通底しよう。

また、「銀河鉄道の夜」の登場人物では、先の青年家庭教師の自分が助かるかどうかの葛藤の末に他者を優先した思いが、カムパネルラが川で溺れるザネリを助けた思いにつながっていく。それは、ジョバンニが「僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百ぺん灼いてもかまはない」と、さそりの話から菩薩道につながる自らの願いに気づき、これからこの願いをもとに生きていこうとした価値観に深く関係しよう。

おわりに

ここまで、「双子の星」から「銀河鉄道の夜」までの流れのなかの真宗信仰の要素を中心に見てきたが、十六歳の賢治の「全信仰とする」とした信仰は、『歎異抄』第一節の「もし衆生がたすかなければ、自分も仏にならない」という「弥陀の誓願」を自らの誓いとすることであり、それは大正十五年に行われた岩手国民学校での賢治の講義「農民芸術」から「農民芸術概論綱要」までにまとめあげられた言葉の「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」という菩薩道を歩む思いにまでつながり、昭和四年の「宇宙意志」信仰へと至り、さらに昭和六年の詩「雨ニモマケズ」の菩薩道への思いに流れ込んでいると考えられる。

また妹トシの思いに言及すると、この間の大正十一年十一月にトシの臨終の言葉を賢治が詩「永訣の朝」で記録したように、トシは最期に蝸の祈りのごとく「うまれでくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかりで／くるしまなあよにうまれてくる」という言葉を賢治の心に刻んで去った。その臨終前のトシに食べさせた雪が「兜卒の天の食」になり「おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに／わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」と祈った祈りは、『歎異鈔』第一節の「弥陀の誓願」に通じることを意識していたにちがいない。また親鸞は『教行信証』「新巻」のなかで『法華経』の「一念往生、^{すなは}便ち弥陀なり」という言葉を挙げて、一念の信心で浄土に生まれた人は弥陀と等しい存在になると述べている。弥勒菩薩は「現在は兜卒天という天の世界にいる菩薩であるが、未来にこの世界へ生まれ、仏になることに決定している」とされるように、賢治はトシが兜率天に行く菩薩として認識し、その意志をもつ者として今度生まれてくるときのトシの使命を感じているのだといえよう。

さらに賢治が後年、昭和四年推定とされる小笠原露あて書簡「252c」下書（四）に「宇宙意志」の思想について次のように述べている点も、「弥陀の誓願」に通じてこよう。

たゞひとつどうしても棄てられない問題はたとへば宇宙意志といふやうなものがあつてあらゆる生物をほんたうの幸福に齎したいと考へてゐるものかそれとも世界が偶然盲目的なものかといふ所謂信仰と科学とのいづれによつて行くべきかといふ場合私はどうしても前者だといふのです。すなわち宇宙には実に多くの意識の段階がありその最終のものはあらゆる迷誤をはなれてあらゆる生物を究竟の幸福にいたらしめやうとしてゐるといふまあ中学生の考へるやうな点です。

この「あらゆる生物をほんたうの幸福に齎したいと考へてゐる」「宇宙

意志」を宇宙にみなぎりわたる人格的意志として理解し、宇宙意志を自らの意志として生きる思いには、「弥陀の誓願」を自らの「全信仰」とするという中学四年時の宣言が継続してその信仰の底流にあるといえよう。

今後は賢治におけるこうした真宗信仰の一連の流れにいかにか法華経信仰が重層的に重なりまた変化していったかという信仰内容について確認することを課題としたいが、本稿では、賢治の真宗信仰が父をはじめ暁鳥敏および島地大等といった視野の広い指導者の導きで芽生え、中学時代に『歎異鈔』を生涯の信仰とすると宣言した心が、賢治の生涯の信仰を宇宙意志信仰に至るまでに形成されたと確認できたといえよう。

さらに、賢治の信仰の出発点で、阿弥陀にすぎる信仰ではなく、弥陀の誓願の通路となる生き方を自ら実行しようとする信仰に向かったことは、万人の幸いの実現のために命を懸けて行動せんとする、賢治の生涯を貫く姿勢となつたといえ、こうした原点を認識することは重要であるう。

以上見てきたように、今年生誕一二〇年を迎えた賢治が、真宗信仰以降「宇宙意志」信仰に至るまで真摯に育んだ重層的な開かれた信仰は、二十一世紀の宗教の平和と共存のために求められるべき貴重な内実を有しているといえるのである。

注

- (一) 栗原敦『宮沢賢治―透明な軌道の上から』(平成四年八月 新宿書房)
- (二) 下西善三郎「宮沢賢治と〈まこと〉の文学」(平成二十三年 暁鳥敏賞入選論文)
- (三) 鈴木貞美『宮沢賢治 氾濫する生命』(平成二十八年八月 左右社)
- (四) 賢治とエマーソンを法華経信仰との関係で論じたものに、大沢正善「宮沢賢治と『エマーソン論文集』」(『文芸研究』昭和五十七年五月)がある。
- (五) 大正四年八月の島地大等による「歎異鈔法話」の内容は定かではないが、翌月九月の「歎異鈔講讀」の筆録をまとめた文章がのちに出版された『真宗大綱』(昭和五年三月 明治書院)に掲載されており類推できる。
- (六) 石田端麿『親鸞全集』第一巻 一九八六年七月 春秋社 一三〇頁
- (七) 六に同じ。各第四巻五三五頁・五六七頁・五六八頁
- (八) 六に同じ。第四巻 五六七頁
- (九) 六に同じ。第四巻 四九一頁
- (一〇) 六に同じ。第四巻 五四五頁
- (一一) 『宮澤賢治と星』昭和五十年七月 学藝書林 一六三頁
- (一二) 『現代語 歎異抄』平成二十年七月 親鸞仏教センター 二八頁
- (一三) 島地大等『真宗大綱』昭和五年三月 明治書院 四八〇頁
- (一四) 六に同じ。第二巻 四七二・四七三頁
- (一五) 「新講歎異抄」『暁鳥敏全集』第六巻 昭和五十年十一月 涼風学舎 四二八頁
- (一六) 六に同じ。第一巻 一九六頁
- (一七) 田村晃祐「真宗」『日本仏教の宗派』昭和五十八年十月 東京書籍 一六四頁